

常なる磐

つねなる いわ season II

令和 4年 1月 4日(金)

その1

◇ 学校【沿革史】を 紐解いて③ 校歌碑

<創立60周年(1964.3月)記念リーフレット 折込面>:【沿革史 第2集】とじ込み記録より「常磐東小学校の歌」=【校歌】について、リーフレットの記録をもとに歴史を紐解いていく。

六十周年のことば 第13代校長 原田市郎

常磐東が、六十年の風雪にたえてきたことは、なんと、すばらしいことであろうか。このことは、同窓生にとっては、なつかしい思い出の歴史であり、在校生にとっては、かがやかしい未来への夢である。

そして、かつて道を説いた多くの教師は、忘れがたい子どもたちの姿を偲んで、限りない感慨にふけることであろう。

母校への思慕と、後輩への愛情との二つの善意が、校歌をつくり、歌碑をたてて、よき年を祝うこととなった。

その心づくしに、おこたえすることを心にして、ごあいさつにかえたいと思う。



昭和39年3月



平成22年ごろ 黒文字に再塗装



令和2年9月 白文字に再々塗装

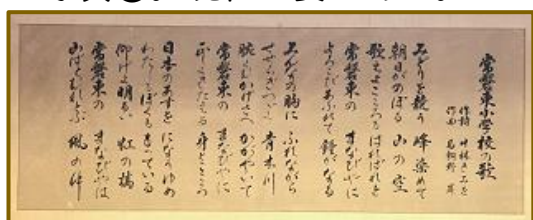
校長謝辞とともに添えられた歌碑の写真①。

白色に刻印された歌詞と校章。台座と石板のコントラストから、台座は御影石、石板は黒御影石のようにも見えるが、実はそうではない。両者とも御影石だ。

校舎移転とともに、歌碑は体育館前に移設される。

②の写真を見ると、白文字が黒へと変わっている。これは、『白文字の塗装が取れて歌詞が見えにくくなったから、黒色で塗り直したんだよ』と、第27代校長 三浦倫夫 先生が再塗装された。

そして昨年、開校120年を迎えるにあたり、歌碑の黒文字が剥がれて再塗装を検討した際、三浦先生からお聞きしたお話をもとに、建立時の白文字にお色直しをしたのが写真③。現在の姿である。



揮毫は、筆の運びから察するに書家の鈴木紫龍氏。けれども、校歌額の文字とは異なる歌碑オリジナルだ。建立から60有余年を経過するが、歌碑に刻印された文字と【母校への思慕と後輩への愛情】の二つの思いは、当時のまま。これからも色褪せることはないであろう。

ここで、石碑文字の具体的な塗装方法（作業）について紹介しておく。



まず初めに行うのは「洗浄作業」である。表面洗浄というよりも石板に刻んだ文字のくぼみに付いた汚れを取り除く作業だ。手洗いで細かな部分の十分な洗浄ができないため、高圧洗浄機を利用した。

その後に行うのが、写真で示した「マスキング」である。

つまり、文字以外に付いたペンキを取り除く作業を軽減するために、彩色エリアを限定するための作業だ。「養生テープ」「マスキングテープ」以上に、たまたま DAISO で手に入れた「マスカートープ」が大きく作業効率を上げた。



マスキングが済んだら、ラッカースプレーで塗装する。これは石材加工店から仕入れた情報である。実際の方法は、文字の刻印前の段階で文字が印刷された特殊なシートを石板に貼り、その後に刻印作業を行う。洗浄後、ラッカースプレー塗装をし、最後にシートを剥がせば完成となるわけだ。

学校で行った作業はそういうわけにはいかない。こまめにマスキングをしたとしても余分な塗装は残り、これを取り除かねばならない。そこで活躍したのが「カッターナイフの替え刃」である。塗料がしっかり乾いた後、髭剃りの要領で刃をあてていくと、余分な塗料をきれいに剥ぎ落すことができる。仕上がりは、まるで床屋で髭剃りをしてもらった後のようにきれいさっぱり。

作業から1年が経過した歌碑が、下の3枚の写真。※左：裏面 中・右：表面拡大



裏面は大きな変化はないが、表面は細部に塗装の欠落が確認できる。原因を推察するに、塗装前に十分に洗浄を行

ったつもりであったのだが、細部には経年の汚れが残っており、その汚れの上のった塗装が、風雨などで汚れが落ちる際に塗装も欠落したのではないかと考えられる。



文字の大きな校訓碑については欠損箇所はなく、小さな文字の塗装こそ技術が求められるわけだ。

教育も同じ。目立たぬ小さな部分を大切にしてい